読書のみちしるべ

『鉄のあけぼの』

JFE ホールディングス社長
経団連税制委員長
柿木（かきぎ） 厚司（こうじ）

作家の黒木亮先生から、当社の初代社長（当時の社名は川崎製鉄）である西山弥太郎について調査したいので関係者へのヒアリングも含めて協力してもらえないか、と打診があったのは15年ほど前だろうか。私は当時総務担当でもあったので、協力しますとは答えたものの、なにぶんかなり昔の話であり、西山弥太郎に関しては別の本も多く出版されている中でなぜ今改めて、というのが当初の感想だった。

黒木先生は、その後綿密に下調べをされ、なおかつ存命であった当社の当時の関係者にヒアリングも実施してこの本を書きあげた。その努力と筆力はまさに賞賛に値する。

出版後、読後感としては、もちろん評伝と小説の違いはあるにしても、今まで自分が思っていた人物像がいかに平面的、表層的であったか思い知らされた、というのが第一印象であった。この本は、鉄鋼業界に身を置く立場からは身内本であり、当社のセールス本と思われる方もいるかもしれないが、戦前および戦後の日本産業史を小説に取り入れた作品としても大変興味深い書物だと思う。鉄という素材産業を題材に日本の産業がどのように復興を成し得たか、また、それに関わった人々がどれほどの熱い思いや努力で目標を達成していったかが、西山弥太郎という人物を通して生き生きと描写されている。

1949年、西山は、製鉄業の分離独立を避けるために当時の経営層が提案した川崎重工業社長のポストを蹴っても、製鉄業分離を主張し、長年の夢である一貫製鉄所の建設にまい進した。さらに、その後実行した日本初の臨海製鉄所である「千葉製鉄所」の建設は、暴挙・二重投資と批判されたが、怯むことなく、〝日本の復興には安くて大量の鉄が必要〟という信念を曲げなかった。資本金5億円の会社が約160億円の投資をするという、当時でも考えられないスケールの大きな計画だった。

これを世界の鉄鋼需要の増加を確信して経営者としての断固たる決意で進めたことは、私も含めて学ぶべきことも多いと感じている。若い人には日本産業史的小説として読むのも面白いだろうし、勉強になると思うので推薦したい。昨今、明るい兆しがみえているとはいえ、いまだに経済停滞が続く日本において、経営者として今一度日本の復興、経済再建に尽くした人物像を描いた小説を読み返してみるのも意味があるのではないかと考える次第である。

著者：黒木亮　発行：毎日新聞社